

ジャパン・スポットライト 2019年9/10月号掲載（2019年9月10日発行）（通巻227号）

英文掲載号 <https://www.jef.or.jp/jspotlight/backnumber/detail/227/>

ジャンウェルナー・ミュラー Jan-Werner Mueller 氏（プリンストン大学 教授）

コラム名：Special Article 2

（日本語版訳版）

世界的なポピュリズムの「津波」が訪れているのか？

我々の時代には、「ポピュリズム」という言葉が溢れている。あらゆる種類の政治家が、右派にしる、左派にしる、ポピュリストというラベルを貼られている。エマニュエル・マクロンでさえ、ある意味で、ポピュリストであると非難された。「極端な中道派」のポピュリストを代表していると言われたのだ。更に、特定のイメージがメディアと学者のコメントの世界を席捲してきている。それは、我々の時代に広がる政治的ダイナミクスを理解するための鍵とも言われている。ポピュリズムの止まらないように思える「波」のイメージ、あるいは、EU離脱党のリーダーであるナイジェル・ファラージ（彼の目には、「波」の比喩は、明らかに、彼自身の世界史的役割を正当に表すものではなかったが）が、ある時点で言ったように、「ポピュリズムの津波」はそのイメージに忠実であろうとして、今やあらゆる場所でエリートと既成組織を洗い流そうとしている。

しかし、波のイメージは、深刻な誤解を招き、そしてそのことはポピュリストの政党として考えられるものの広すぎる概念（その結果、新興勢力と政治的な「勃興勢力」が、自動的にポピュリストに含まれることになる）に基づいて言われているからでもある。伝統的な見識によれば、言われるところの「エリートを批判する」か、あるいは「既成組織に怒りを抱いている」人々は皆、ポピュリストと考えられるべきものなのだ。このことは明らかのように思える。しかし実際にはとても特殊な考えだ。最近に至るまで、いかなる市民教育の教師も、権力者に対して目を瞑り続けることが実際には市民の側における良い民主主義的な関わり方の印であると告げたことであろう。しかも、2010年代において、我々は常にエリートに批判的な人は誰でも何らかの意味でポピュリストであり、民主主義にとって危険をもたらす可能性のあるものだと教えられてきた。明らかに事はそのような単純なものではない。

ポピュリズムとは何か？

確かに、ポピュリストは、野党の立場にある時には政府（そして他の政党）を批判することは事実である。その意味で彼らは実に「反体制派」である。しかし彼らはまた他の何かも行う。そしてそれが重要なのだ。彼らは色々なやり方で、彼らがそして彼らのみがポピュリスト達が言うところの「本当の国民」あるいは「沈黙の多数派」を代表すると主張する。この真に国民を代表することへの独占の主張はそれ程悪くは聞こえないかもしれない。そ

れは直ぐには人種差別主義や欧州統合への狂信的なまでの憎しみと同じではないように思える。しかしながら、それは常に民主主義を損なう二つの意味を持っている。第一に、そしてまた明らかに、ポピュリストは、政権を目指す全ての他の競争者は、基本的に不当であるとみなすという事実がある。彼らの立場は政策や価値観についての不同意だけではない。不同意は、結局のところ、民主主義においては全く当たり前であり、理想的には生産的でさえある（民主主義が同意についてではなく、そもそも構造的に意見の違いを含むものである—もし我々が魔法のようにいつも全てについて同意するなら、市民間の不同意を扱う手段としての民主主義を必要とはしないだろう—ことを忘れないようにしよう）。しかし、ポピュリストは他の全ての者は本質的に悪者であり腐敗していて邪悪である、そして自分たちが「国民の意思」としてしばしば言及することを実行に移すことが出来ないでいると非難する。2015-2016年の大統領選挙でドナルド・トランプが彼の政敵について言った類のこと（「邪悪なヒラリー」、「彼女を閉じ込めろ」）は、多くの意味で極端であった。しかし、それらは本当は例外ではなかった。トランプが言ったことは、多かれ少なかれ、全てのポピュリストが言いがちなことなのだ。

第二に、より不明瞭だが、ポピュリストはまた「真の国民」と思われる人々についての理解を共有しない全ての市民（そして、従って、政治的にポピュリストを支持する傾向を持たない人々）は国民と呼ぶに値しないと示唆する。このことの二つの例は、おそらく、より自明ではない点がある。ブレキジットの記念すべき夜の終わりにナイジェル・ファラージは、結果は「真の国民にとっての勝利」と考えられるべきだと述べた。それはもちろんEU残留を望んだイギリスの選挙民の48%は「真の」国民ではなく、英国国民ではないと言っているのだ。あるいは、大統領選挙期間中のトランプの概ね無視された主張を考えてみよう。トランプ候補は、「唯一の重要事項は国民の団結である。何故なら、他の人々は何の意味もないから」と表明した。

ポピュリストは益々国民の統一ないし団結について語る。しかしそれは常に彼らの条件に基づく統一であり、彼らの国民概念に従って統合されたくない者は誰でも様々な方法で除外されてしまう。ポピュリズムについて理解すべき重要な点は、それが単なる「反エリート」ではないということだ。誰もが権力者を批判することが出来る。明らかにそのことは彼らが正しいことを意味するものではない。しかし、すぐさま、彼らを民主主義にとってともかく危険な存在だと非難することも出来ない。実際、その逆であるのかもしれない。ポピュリズムについて重要なことは、そしてそれはとても悪質なことなのだが、非常に教訓的なやり方で、常に他者を排斥する傾向を持つということだ。政党政治のレベルではこれは明確に他の全ての党が悪質で腐敗したものとして非難され、国民自身のレベルではより不明確だがポピュリストに同意しないもの（あるいはしばしば、既に弱い立場の少数者）は、真の国民から外に置かれる。要すれば、反エリートが問題なのではなくて、反多元主義が問題なのだ。

換言すれば、ポピュリストは政治的問題を所属の問題にまで小さくしてしまう傾向があ

るともいえる。トランプは彼の政敵を政策議論の場では、拒否しようとはしない。しかし、単純に彼らを「非アメリカ人」と呼ぶ。レクセップ・タイップ・エルドガンはある時、「我々は、国民だ。君たちは誰だ？」（もちろん彼は彼らもまたトルコ人だと、知っていた）という声明で、反対勢力の批判を行った。そしてポーランドの事実上の支配者、ヤロスラフ・カチンスキーは、デモを行った人々を遺伝子に裏切り者の血を持つ最悪の類のポーランド人と非難した。

ポピュリズムは、このように主として、政策の中身の問題ではない。我々は今日、「ポピュリズム」のレッテルを日常的に（また全く考えずに）貼られた現象を把握するのに多くの他の概念を持っている。移民に対する多くの態度や保護主義をグローバリゼーションの様々な状況に対する反発を示す適切な言葉として描写するための排外主義を考えてみよう。また、ポピュリズムには右翼と左翼の形がありうることに注目しよう。後者については、ウーゴ・チャベスと彼の継承者であるニコラス・マドゥーロが最も明白な例である。同時に、ヨーロッパの新しい左翼政党を、単に彼らが現状に批判的であるか又は社会民主主義者が新自由主義の政策をあまりにも受け入れすぎると考えているというだけでポピュリストと呼ぶのは正当化し難い。例えば、スペインのポデモス党の考えを好きになる必要はないが、彼らはトランプやファラージと同じカテゴリーには属さない。

ポピュリストはどのように統治するのか？

事実上、定義によれば、ポピュリストには統治は出来ないとしばしば言われる。もし彼らの主たる特徴がエリートを批判することであると考えるなら、彼らが政権を取れば彼ら自身が「エリート」となったのであり、それ以降彼らの反エリート主義を捨てなければならない、すなわち、ポピュリストであることをやめなければならないと考えるのが自然だ。もう一つの人口に膾炙した見方によれば、ポピュリズムの中核となる特徴は、その代表者たちが皆政策について驚くほど単純な考えを持っていることだ（真の民主主義者は複雑なことに向き合い、ポピュリストは単純なことを考えるというのが本質的に言われる議論で、ドイツの社会理論家、ラルフ・ダーレンドルフが説いた議論としても有名である）。この見方によれば、愚かな人々に対して成された扇動的な公約は、いったんポピュリストが政権を担うことになると守られないだろう。ポピュリストはその公約を見直し、責任のある政策の実行者にならなければならないだろう（さもなければ、もしそうならないなら、有権者に対する彼らの失敗は明白となるだろう。すなわち、いかなる国境の壁も建設されず、またいかなる貿易協定の再交渉も成功しない、等々）。これらの全てのシナリオが、如何にして同じ結果を意味するのかに着目しよう。ポピュリストがポピュリストであることを止めるか、彼らの党が必然的に衝突し燃えるか、のどちらかの理由で問題は自然に解決する。

ところが、これらの仮説は全て単に安定的でないだけでなく大きく間違っている。我々の時代には、ハンガリーから、トルコ、ベネズエラそしてインドに至るまでポピュリストが実際統治できる、またより重要なことには、特にポピュリストとして、即ち反対勢力の正当性を真に

認めない者として統治できることを認識できる十分な事例がある。従って、彼らが野党であれ選挙とは関係のない組織、司法組織であれメディアであれ、そこから出てくる批判を自動的に腐敗した裏切り者の批判として非難することは偶然ではない。

明白ではないが、我々は今までに我々がポピュリスト特有の統治の方法と呼んでもよいものの特徴的要素を認識できる。それはナショナリズムに基づくもので(しばしば人種差別的なトーンを伴う)、また、国家を自分の党に忠実な者のためにハイジャックし、より曖昧だが、政治力を確保するために経済を武器とし、文化的戦争、後援と大量の恩顧主義の組み合わせに基づくものだ。この特徴づけは、同時代の右翼のポピュリズムとファシズムを同等のものとするか、または、ポピュリズムを新しい国際的に成功したイデオロギーとして見るか、または「普通の人々」が、彼ら自身にポピュリズムと権威主義への切望を結びつけると仮定するかという政治的診断から外れる傾向をもつものだ。

ポピュリストは、もし十分に大きな多数派を有し、対抗勢力が弱体なら、国家装置それ自身を私物化しようと試みるだろう。即ち彼らは少なくとも理論上は中立的な官僚制であるべきものを党派的な忠誠者に置き換えようと試みる。多くの政党が官僚を利用しようと試み、明らかにその全てがポピュリストと決めつけることは出来ないとの反論があるかもしれない。それは正しいが、しかしその違いはポピュリストは国家は彼らにとり唯一のものであるとの議論によって国家をむしろおおびらにハイジャックできることである。彼らのみが真に国民を代表するという彼らの中核的主張を思い出してみよう。もちろん、国家は国民に奉仕するために存在する。そしてもし彼らが国家を自分の物とするなら、正当に所有するものを自分の物とするのは実質的に国民自身である。

もちろん、この私物化は象徴的な次元にとどまらない。権力についてもまたそうである。多くのポピュリスト政権にとって、例えば、検察組織を制御する、あるいは忠誠を誓う者を公共のメディアに入れることで、メディアの多元主義を著しく減少させることが重要であった。

ポピュリストの統治のもう一つの重要な側面は、政治的手段として経済を使うという特定の形態とともに大量の恩顧主義である。ここでもまた、多くの政党が政治的支持者に対して、便宜ないしは行政的な優遇措置を与えるといった恩顧主義は行っているとの反論があるかもしれない。ここでもまた、繰り返したが、その違いはある市民たちのみが真の国民であるというポピュリストの中核的主張に関わっている。真の国民だけが正当な統治の利益を享受することを保証することは隠すべきことではなく、また恥ずべき事でもない。むしろ、ポピュリストの見解からすれば、これこそがあるべき姿なのだ。そして再び報いることに値する真の国民に報いるということの象徴的な次元はまた現実の政治的理由を持っている。ハンガリーの首相ヴィクター・オルバンのような人物達は彼ら自身の中産階級を作り上げた(真の国民のイメージに適合するとは、国粋主義者で、キリスト教徒で、家族という伝統的概念を信奉するといったことだ)。そしてこれらの層の間に信頼できる選挙支持基盤を見出したのだった。

注意に値する経済に関係した更なる原動力がある。一般的に権威主義は、抑制欠如の政治（1960年代後半にポーランド系イギリス人の社会学者スタニスラフ・アンドレスキによって作られた用語だが）と手を携える傾向がある。これについて一つの率直な説明がある。法的、政治的な制約の欠如は自己取引を大幅に容易なものとする。このことは、却って、将来における処罰を避けるために司法や政治システムへの固いグリップを維持させる必要を強化することになる。しかしまたそこには政治的な論理もある。他人を犯罪に引き込むことは体制に対する忠誠心を強制することだ。

これらの力学は抑制欠如の政治を超えてハンガリーの社会学者バリント・マギヤールが彼の母国における「マフィア国家」の勃興に言及するときを考えていることだ。マフィア国家には、テーブルの下で現金を変える手とともにある大きな封筒は含まれない。むしろそれは、国の組織の利用であり、表面上の法的な意味においては、特に、政府調達で、不思議にも一人の入札者だけが現れるということだ。マフィア国家は、マギヤールが言うところの、拡張された「政治的家族」によって支配され、またそれらに恩恵を及ぼす。絶対的忠誠は、物質的な報酬、また同じように重要なことは、無限定の将来の保護と引き換えである。「現代の官僚制国家をコントロールすることの主たる利益は、」と、ハンガリーの観察者は述べる、「それは、無実の者を弾劾する権力ではなくて、有罪の者を保護する権力である」。

ここで、イデオロギーは政治的なまた家族的な従属を示す信用のできる指標として機能することが可能だ。リーダーによる挑発と怒りに満ちた規範の破壊と共存することは、さもないければ正しい民主主義的な標準への信頼を維持していると疑われるかもしれない者に対するリトマス試験である。更に、規範に違反することは、政治的な家族のメンバーと妥協することなので、彼らは相互の保護のために団結しなければならない。そしてそれはマフィアのもとの特徴としての信頼と信用を生み出すのに役立つものだ。

新しい権威主義的なポピュリスト国家は、よく言われる歴史的意味において、ファシストではない。一つの重要な点で、彼らは、実際、ナチの統治のパターンの逆を行っている。政治学者と亡命者エルンスト・フランケルが証明したように、ナチの統治は暴君ないし全体主義についての伝統的な説明が示唆しがちなように完全な無法と混沌によって特徴づけられるわけではない。多くの生活の分野で物事が正常にまた予測可能なやり方で進行して行った。結婚が行われたり、取り消されたり、商売の契約が作られたり、実行に移されたりと。これらの比較的法的に正常な分野とともに、しかしながら、常に完全に予測不能で説明できない方法で起こってくる「特権国家」の脅威が存在した。フランケルは、「二重国家」という言葉で、正常で予測可能な生活と予測不能の抑制の側面との断層を描写した。

今日我々は、多くの点で政治の分野はいくつかの一見合法的に見える操作を除けば比較的正常であるが、一方経済は権力の恣意的な発動に晒されているという相違を持った二重国家に直面しているとすればどうであろうか？あるいは、おそらく、それほど恣意的でもない。というのも、もし政治的家族に対する忠誠が経済的成功にとって重要であるなら、処罰は実際予測可能だからだ。現金を集めるのに、軍隊を送る代わりに、政府は単に税務当局に

対して警報を鳴らす。そして彼らは常に何かを見出すことが出来る。結果として、影響力のあるビジネスマンで必ずしも明白に体制に忠実でない者は持っている株式を売るように言われてそれに逆らうことが出来ない。このようなことは、社会主義政党と連携していると言われていたハンガリーの少数独裁政権ではよく起きていた。社会主義者キム・レイン・シェッペルが指摘したように、これらのパターンは常に外部の者にとって容易に見極められるとは限らない。というのも、本質的に政治的な行動は常に経済的必要性によって命じられたという装いをとることが可能だからだ。

ポピュリストの統治のやり方の最後の一つの側面が強調される必要がある。政権への反対がある場合に、たとえそれが政権与党にとって真の危険とはならないとしても、その不同意をできる限りシステムティックに非合法化することがこのような体制にとっては道義上も象徴的にも極めて重要となる。最も目立った戦略は、例えば、市民社会の示威行為と見えるものは、究極的にはそのようなものではないと主張することである。ポピュリスト政府が述べようとすることはすべて政権側で操作されたもので、外の誰かに支払われるものである。そして、ジョージ・ソロスであれ、CIA であれ、いつもの被疑者を見せびらかすことが出来る（真に創造的な陰謀の理論家には何の限界もないのだが。エルドガンの政権顧問が遂に明らかにしたように、ゲジパークの抗議集会はイスタンブールの新しい空港の開港後、トルコ航空との競争が激化するのを恐れたと言われるルフトハンザの行為だった）。しかし、基本的論理はいつも同じだ。ポピュリストは真に国民を代表するのは彼らだけであると主張するので、定義上、真の国民が路上で彼らに抗議しているのではない。ある意味で、その抗議者たちは政権外の敵に雇われた「偽市民」とであると証明されなければならない（このことはまたポピュリストたちが政府の側に入っても反エリートの立場を止める必要がないことを示している。常に、まだポピュリストが国民の真の意思を実現することを妨げるもう一つの「影の国際エリート」が存在するのである）。

同時に、ポピュリストは前向きに抗議行動を好きになるかもしれない。それは彼らの繁栄の元である文化戦争に火をつける燃料なのだ。このような訳で、トランプ政権の1年目に、スティーブ・バノンが「抵抗」を「わが友」に喩えたのだった。ここでの教訓は、もちろん、市民は抗議のために路上に出ることを控えるべきだというのではなくて、唯、我々はポピュリストが常に排外的な自己認識政治に終わるのを正当化するために、反対意見を自分の都合の良いように変えるのに如何に迅速にまた狡猾になりうるかを知っておかなければならない、というだけのことである。

何故、ポピュリズムか？

我々の時代の偉大な皮肉の一つが以下のことである。以前に述べたように、ある種の伝統的な智慧は、ポピュリズムを複雑な質問に対して最も単純な答えを与える傾向と認識する。しかし多くのこの見解を持つ者はまた、もし、一文で（さもないと140ワードくらいで）、「それは全てグローバリゼーションのせいだ」とか、「(しばしば人種主義の隠語である) “文

化的な不安”のせいだ」というような言葉でポピュリズムの世界的『大義』を誰かが説明してくれれば満足するように思える。

しかし、単純な説明は一つもない。術学的に聞こえようと、異なった国の文脈を綿密に学び、ポピュリスト政党について特にその勃興をもたらしたであろう要因を注意深く見極めることが必要不可欠なのである。明らかに、同質的な腐敗したエリートが経験的に存在し、全く馬鹿げているとはいえない悲嘆すべき事情についての責めを負うべきであるとの主張を行う事情が進行していることが必要だ（そしてまず、悲嘆すべき事情がなければならぬ）。そして明らかに、もし文化戦争のようなものがその国の特徴とされるような事情があり、その結果対立が「誰が本当の所属者なのか？」という疑問への答えとして理解され得るなら、それはポピュリストを助けることになる。しかし、「金融危機がポピュリズムの直接の原因だ」とか、「ポピュリズムの成功は多数者が移民を拒絶したことを示す」といった見解は、単に単純なだけでなく誤っている。後者の場合は有害な結果をもたらす。

政治家とジャーナリストはしばしばポピュリストの再評価の一つの極—つまり彼らは全てその言動を自動的に割り引くことのできる扇動家であると想定する—からもう一つの極—ポピュリストは国民の「真の不安」を究極的に表現しているとまで譲歩する—へと転換する。ポピュリストに我々に対して何が真に市民を不安がらせるかを伝えることの独占的地位を与えることは、如何に代表民主主義が機能するのかについて深い誤解を与えることになる。それは客観的に与えられた利益と自己認識の機械的な再生産についてではなく、後者（代表民主主義）は代表についての政治的要請と市民の反応を作り出す政治家（市民社会、友人、隣人等も同様）のプロセスにダイナミックに構成されている。ポピュリストの言うことの全てが必ずしも虚構ではない。しかし、彼らだけが社会で真に起こっていることを知っていると思うのは間違いだ。例えば、トランプは疑いもなくアメリカ人の一部を彼ら自身が白人アイデンティティ運動のようなものの一歩になっているかのように考えさせることに成功した。しかし、市民の自己認識はまた再び変わりうるのだ。

ポピュリスト政党に投票した者すべてが彼ら自身もポピュリストだということも誤りだろう。それは彼らもポピュリストリーダーたちの反多元性を見解を共有しているということになる。また、ポピュリストが社会についての究極的な客観的真実を我々に示してくれると考えるのも誤りだろう。しかし、多くの非ポピュリストの活動家は正確にこの過ちを犯している。悪名高い「嘆かわしい人々」という言葉を考えてみればよい。あるいは、今日ヨーロッパの社会主義者ないし社会民主主義者が通常考えているように思えることを考えてみよう。彼らは、「労働者階級は右翼のポピュリストの成功が示すように外国人が嫌いなのだ。我々はそれに対してどうすることもできない」と考えている。

この論考の冒頭に述べたように、イメージは常に大きな誤解を招く。結局、ファラージは彼の力だけではブレキジットの投票結果まで持っていけなかった。彼はボリス・ジョンソンやマイケル・ゴープのような既存の保守党の政治家の助けを必要とした。トランプは怒れる白人労働者階級の草の根抗議グループの代表として大統領となった。むしろ彼は、非常に確

立された政党を代表し、ルディー・ジュリアーニやニュート・ギングリッジのような共和党の大物の支持を必要とした。2016年11月8日に起こったことは、ポピュリズムの独立した勝利ではなく、アメリカの政党政治がどのように変わったのかを確認するものだった。共和党支持者の90%がトランプに投票した。彼らは、たとえ調査において多くの共和党員がトランプに疑いを示したとしても、民主党に投票することは考えもしなかった。つまり、今日まで、如何なる右翼のポピュリストも、西ヨーロッパないし北米で既存の保守的エリートとの協力なしには政権につかなかったのである。

政治学者ダニエル・ジブラットが論じたように、ヨーロッパにおける民主主義の強化は保守的エリートの行動に大きく依存していた。両大戦間の期間、彼らは権威主義的またファシストでさえと協力することを選んだ。その結果、多くの場所で民主主義は死んだのである。戦後、たとえもし保守層の中核的利益が十分に報われないにしろ、保守層は民主主義のゲームのルールを守ることを選択した。我々は両大戦間の時代に例えられるような時代に生きているわけではない。そして今日のポピュリストはファシストではない。しかし、教訓は、依然として、民主主義の運命は反乱を起こしたアウトサイダーとしての既存のエリートの選択の問題として存在することを孕んでいる。ラリー・バーテルズが指摘したように、経験的に、右翼ポピュリスト的心情の増大（「津波」までとは言わなくとも）を想定することすら疑わしい。しかし、示され得ることは、政治の世界の起業家達そしてより確立された活動家達が時を超えたこのような感情を取り鎮めるのか、または動員し掻き立てるのかである。我々はポピュリストと協力したり、その考えを模倣したり、あるいはその行動を事実上許したり、信頼出来る批判から守ったりしているエリートを拘束しなければならない。

抵抗し難いポピュリストの波のイメージを拒絶することは、我々が民主主義についての懸念はそれほど大げさだったと結論づけるべきだと言っているのではない。しかしながら、我々はある種の懸念—特に「普通の人々」に関連する場合、そして彼らのポピュリズムに対する消すことのできない欲望に関係する場合—が、我々の政治的挑戦を誤った方向に形作られることを許さないように注意すべきである。一つの研究課題は、正確に何が、またどのようにして保守派の人たちが彼らの態度を変えたのかであろう。おそらく今日の保守派は20年前あるいは50年前の保守派の人々と比べて日和見主義にすぎないか、あるいは道徳的に抑制が効いていないかのどちらかではないだろうか。

(了)